

写真と私

正木三郎

はゆっくり休み、五日からいつものように働くことになる。七日はなぬか正月といって、七草ぞうにをたべる。十一日は鏡開きで、おそなえものをおろして、甘いもの(せんざいなど)を作って食べる。十五日は、「かいばしら」といって、ごはんの中にもちを入

町方の隈府町では、以上のほかに「蓬萊さん」という飾り物が行なわれていた。これは三方の上に米一升をおき、つるをダイコン

(熊本工業高校教諭)

一つの間にか私は七十を越えました。七十年の人生には色々な思い出があります。私の幼年時代の唐人町は熊本の商業の中心地で

各銀行や料亭、熊本券番などあって盛んな繁昌振りでした。当時は自動車は一台も見当らず自転車と人力車の町で明十橋から坪井の

私達も町の中が遊び場電柱と電柱の間でよく鬼ゴッコをいたしました。夏の夜など縁合を出して白い肌着を着た町内の方々が波

うちわをパタパタさせながら将棋に夢中になったり、夏の夜の話題に花を咲かせたり、川柳にもある様な情景は今も遠い思い出とな

りました。

私が五歳ぐらいの時と思いますが東雲座に動く写真、すなわち活動写真を見た事を覚えております。

駒田好洋という人気のある活弁者が映画の説明をして、結びに必ずスコップ非常のご喝采と身振り手際よくした事をよく真似し

たものです。当初のフィルムは初めと終りを輪につないで何回となく同じものを見せたようです。

私の写真に対する関心もこの当時から初まったよう小学生頃には日露戦争のフィルムなど本格的な映画になり、子供五銭、大人

十銭でよく見にまいました。その後Mパターという巡業が人気があつて森や海をグリーン調の色にしたり、夕陽などセピア調の色

にしたフィルムを見せてくれました。中学三年頃と思います。電気館でキネマカラーという本格的な天然色映画を見るに及んで写真

は必ず天然色時代が来ると私の写真に対する憧れはいやが上にも盛んになりました。コダックのベス単で写し初めたのが私の写

真への第一歩です。

私は戦災と、二度の水害でまるはだかにされましたが今日私があるという事は皆さんのご厚意と写真のお蔭と深く感謝していま

す。この様に考へて見ますと私の人生は写真道ひとすじに歩み続けて今後も際限のない写真の道を歩き続けてまいります。

人はそれぞれ幸福であれかしと願わない者はありません。又この事が私達の希望でもあるわけです。しかし自分は人よりもきれ

にありたい、又お金持になりたいという事になれば希望という事ではなく欲という事になります。古今の歴史を見てもこの欲のため、

あらゆる悲劇が繰返えされて居ります。希望のない人生は無味乾燥です。しかし今の社会情勢では単に希望のみでは渡れません。

人よりも、という欲がなければ生きて行かれないありさまです。作品についても同じ事がいえるようす。これが私の作品ですとそ

の人のすべてを打ち出した作品には心にしみるものがあります。欲の出た作品には内面的な美を感じる事ができません。しかし現

在ではこの欲のある作品が大手を振って堂々とまかり通る世の中です。世渡りのいかに困難かを感じさせられます。

「正しき者は幸なり」という事が私の作品の根本です。この根を踏みはずす事なく写真の道をひたすらに進んでまいりたいと思

ます。

(写真家)

雛人形

朽葉繁子

一月も半ばとなれば各商店には破魔弓や羽子板にかわって早やくも豪華な雛人形が並びはじめる。史上最高をいわれたポーナス景

気の波にのって財布の口も大幅にゆるみ、高価な雛人形も売行きはいいようである。しかし嫁いだ娘の初女児の祝いのために贈る

ひな人形も、最高品など選びたいが、つましい経済がそれを許さない。そこで女親は夜の目も眠らず考えこんでいる。嫁がせてから

も苦勞がまだ続いている。

昨年のお話で嫁いだ娘が自分の子供の時の雛人形を里の母より送ってもらい、ほんぼりの紙をはりかえて親子二代使って母も娘もホ

ットしたというのがある。雛祭りは子供の災禍を人形に転嫁することからきたという。人形に悪霊をつけるといふ考え方は日本だけ

でなく西太平洋のバガンダ族などでも人間のしあわせをもたらす霊力をもつものという考え方があったようである。正月の祝儀など

に目鼻が書かれ、だんだん着物もきせるようになって今のひな人形の形が出来たようである。

雛人形の原型として残されているものに「土佐の糸ひな」「薩摩ひな」などの江戸後期のものが東京上野の国立博物館に珍品とし

て納められている。前者は、木に糸が巻きつけられていて、後者は竹に髪の毛をさしこみ紙の衣装がつけられている。どちらも髪が

長いので男女の区別はつけにくく顔も書いてない。

雛人形の姿も飾り方もいろいろと変ってきた。元禄の頃の絵をみると立雛が主で座ったひなは少ない。男女のひなだけで外の種類

の人形はなかったが次第に随臣五人ばやしと種類がふえていく。雛を売る場所も天明の頃は天びん棒で、つづらをつかいた雛売りも

いたというが、そのうちに町に雛市がたつて栄え、江戸では十軒店(じゅっけんだな)がその随一で明治の末頃から、おもちゃ屋や

デパートに並ぶようになったという。江戸時代の末までの雛は小さくても座って二十センチ位はあったそうだが、明治以後都会は小

型のものが増えていく。しかし一茶の句に

手のひらに飾ってみるや 市のひな
というのがあるから江戸時代でも小型もあつたと思われる。戦時中から疎開地をあちこち歩いた雛人形は三人官女も五人ばやしも

三人の仕丁、左右の随臣も一人かけ二人かけて行方不明になった。

日本の社会では人数のかけたお雛さまがみられるようになって根底から構造をゆすぶられて改造されてきた。戦後の新編成メンバ

ーで人間の生活に段を作ったり上下の階級などもなく皆平等の権利と立場に立ってほんとうに明るくたのしい一家団らんのものとして

して、雛人形が飾られるように変ってきた。今日、都市では、きめこみなどの小型が流行でケースに入ったものを飾る時代の生活様

式による変化がみられる。昔の浮世絵にあるタンスの引出しを利用して飾っているのは今のアパート生活と思ひ合わせて、うな

づかれる。小さな、ひょうたんに、目鼻をつけた一対の交り雛は、もとは人形好きのアマチュアが考案工夫した雛だといふが明治の

頃の清水晴風という人が「ひな百種」と称する古今、各地の雛と自分の創案した雛とを加えて百種の雛を手作りしたのが今も残っ

ているようである。こうして日本の雛人形は特徴ある発達をし、母と娘にとっては幼い日の思い出として見果てぬ夢であり、雛祭り

もゆかしい行事である。

最近、女性には農山漁村でも働き手として労働にかり立てられ、都会でも会社や工場でなくてはならない大切な人として生産活動に

参加して現実は女性にこの夢を忘れさせているようにも思う。

立派な職業人社会人であると共に婦人はいつの世にもその天性の愛情と優美さによって世の中を明るく美しくする役割を果すこ

とを雛人形によせて考えてみたいと思う。

